

大隈侯爵の心

共回舞

清演説會や貴族院議員村田保が職を嗜して海軍腐敗を痛撃したことなどは大きい反響を喚起した。結局シイメンス會社と海軍大佐澤崎寛猛の關係及び三井物産會社と海軍中將松本和との關係などが明白になつて世人の疑惑は山本權兵衛齋藤實らの身邊にも向けられた。この時に當り海軍大佐太田三次郎が神田青年會館で演説して頗る辛辣に海軍巨頭の胸を抉ると世論は益々沸騰した。その結果同志中正國民三派の山本内閣弾劾上奏案の提出となり海軍豫算の大削減となりひるひるで内閣倒壞の致命症となつた。かうして山本内閣は三月二十四日總辭職をした。

當時君は海軍收賄事件について嚴正批判を下して假借しなかつた。最初その事を耳にすると直ぐに『報知』紙上で薩閥を狩れの題下に所見を洩らした。君は海軍武官收賄問題の如きものが議會で論議せらるゝ事は國家の體面上誠に痛惜に堪えぬ事であるが世間の疑惑は過去数十年繼續して居たのである。所謂隠すより顯はるゝはなして積惡の家に餘殃あり。古人我を欺かずと謂つべしであるといつて正義の上から審判を加へこれ迄は長州の天下とか薩州の天下とか甚だ忌はしき言を耳にしたが今後は國民の天下とせねばならぬと叫んだ。

山本内閣に對する嚴正批判

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

ことに言及した。それに於て如何に當局大臣は海軍收賄の事實が無根だと議會で言明しても司法官の活動によつて着々實證を握り醜類が續々檢舉される事になつては如何とも致し方あるまい。今日のところですら現内閣の生命は絶たれた事を確言して差支えないといつて後繼内閣の事に及び加藤尾崎犬養らの聯立内閣でもやつて見るが宜い。下院に政友會が多数を占めて都合が悪ければ無論解散を斷行し堂々政綱を公にして國民の輿論に問ふが宜いといつた。君はそれと前後して國民はその權利を自ら取れと教へ國民は憤然騒起して閥族の備兵を粉碎すべきである」と勵ました。かうして君はイギリスの老ピットのやうに少數黨を提けて直ぐに議會を解散し政弊を一掃すべき人物の出現を要求した。

(二) 國民政治の時代來れるを告ぐ

君は當時一般閥族の政治的罪惡を斥け國民が政治上自覺せんことを切望してやまなかつた。それでその年三月『憲政の原因を根絶すべし』と題する論文を『新日本』に掲げて國民が目ざめなければ憲法上與へらるべき當然の權利を得られないのみならずその既に與へられた權利をも褫奪せられるであらうと教へた。

君は以上の意味を秩序立て、論明するために史的考察を薩長勢力消長の上に用ゐた。

要政



そして時代の進歩と推移とは最早閥族政治の存在を管に議論の上で許さぬのみならず、事實上にも許されぬことを述べて、閥族衰滅の最後の吊鐘を打鳴らした。君の最も高調したのは政治上に於て一日も早く國民劇の幕を開け、といふことであつた。

君は政治上の本義が君民一和の上にあることを信じ、薩長が君主と民衆との間を疎隔して、その間に大きな溝を作つた事を非とした。君は勿論公平に幕末以來の薩長の功績を認め、その功績も結局彼等の政治的罪惡、專制的政治の爲に殆ど打消されたことを明かにした。君は更に一步を進めて、薩長が維新に於ける功績その物も詮じつむれば、大勢に乗じた迄である。天下の氣運は薩長なくとも、必然的に斯くなつたのである。が、その罪過の上より問ふと如何であるか、彼等は教育的にも、行政的にも頗る過つた。そして遂に政黨そのものを誤らしめて仕舞つた。我輩は茲に至つてその功罪の能く償ふなきを思ふと斷言した。君が信頼するのは政黨でもなく、勿論閥族でもなく、國民そのものであつた。君は國民の政治上に於ける冷淡な有様や政治的訓練の缺乏を遺憾としたが、それは國民に政治知識を與へないで、只管國民を政治的無知に導いた薩長閥が殊にわるいと見た。國民には未だ清新な元氣がある。正直で一本筋なところ、純一で眞面目なところがある。彼等が眞に政治的無知から目ざめたら、茲に國民政治の幕が當然開かれるべきだといふことを信じた。そ

國民政治の時代來れるを告ぐ

九

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

100

れて君は左の如く論結した。

大政維新の際よりして薩長が政權を握つて來たが、これは當然憲政の實施と共に跡を絶つべきであつた。然るに國民の憲政に對する自覺が開けず、薩長はその儘情力的に勢力を保つて、今日に至つてゐる。即ち過去五十年間の政治の中心人物を見るに、薩長の系統を引いた者のみである。これを觀劇的に評すれば、これまでの舞臺には唯薩長の役者のみが登つた。併し薩長劇は最早この邊で終を告げ、これよりは國民劇に移らねばならぬ。

この時に當つて我輩はわが日本民族に固有の性質として、一たび非常の困難に遭遇するや、必ず恐るべき奮發心を激發して、飽迄これを矯正せずば已まざらんとする氣力あることを確信する。これは從來の歴史が證明する。それにこれからは輿論だ。純然たる輿論の勢力によりてのみ將來幾多の困難より免れて、國運を隆昌にすべきである。今やその過渡期である。即ち薩長劇了つて、國民劇が將に開かれんとする。國民はこれを自覺して、自ら任ずるところ大なるべきである。

以上によつて、君が如何に能く國民を導かうと力めたかがわかる。それによつて、君が政治上の第二維新を實現すべきやう、國民自らの奮發と自醒とを強く求めたことがわかる。

が、山本内閣は君の清議を忌んで、新日本三月號及び四月號の發賣頒布を禁止した。この時に當つて、政界は將に一大回轉を行はうとしてもがきつゝあつた。これは山本内閣没落の後を誰れが繼ぐか、そして局に當るものがどんな經驗を以て天下に臨むかといふことが、殆どわからなかつた。有様に徴しても知れる。この際、一步を誤るとどんな事になるかわからぬといふ恐れがあつた。桂内閣の短命、護憲運動の勃興などで、國民の神經がひどく興奮してゐたところへ、シイメンス事件などで、海軍腐敗が明かにされるに及んで、彼等の神經は更に鋭く尖つた。彼等の憤慨は極度に達した。この重大時局を収めてゆくことは容易でなかつた。國民もまた政治家も、ひとしく國家興廢の岐路に起つた。

### (三) 山本内閣の崩壊と元老會議

がこの時勢に向つて、比較的に盲目なのは、閥族政治家であつた。彼等は動もすると依然として政治上の薩長劇を繰返さうと力めた。長派の一分流たる清浦奎吾が最初、山本内閣のあとを引受けようとした一事によつても、閥族政治家の暗中飛躍が察せられた。

いつも政變に際して開かれる元老會議が、三月二十六日以来、連日續いた。けれども桂が没し、西園寺が政界を退いた爲めに、政界は一時、その重心點を失つた形で、後繼内閣のことは

山本内閣の崩壊と元老會議

101

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

101

容易に決定しなかつた。が、二十八日第三回目の會議で、徳川家達を首相後繼者として推薦することに決したが、徳川家達は、三十日参内して拜辭の旨を奏上した。その結果、第五回會議で、更に清浦奎吾を後繼首相に推薦することになり、清浦は三十一日参内して内閣組織の大命を拜受した。ところが、清浦は最初から世論の反對を受けた。或者は清浦の主義、經驗なきことを難じ、或者は、政黨政派に何等關係なき清浦を奏薦するは不可解だと憤つた。諸新聞も一齊に反清浦内閣の態度を明示した。

當時君は清浦内閣の出現せんとするに對して、公正な立場から批評を下した。君は清浦子が愈々時局收拾の大任に當る事になつたが、果して如何なる内閣が出来るか、たとひ如何なるものにせよ、山本内閣よりは宜からうと思ふといつた。そして君は清浦に果してそれ丈の用意があるかどうかを疑つて、清浦子が果して如何なる見地に起つて、内治外交、國防、財政の根本政策を確立するかに、得て窺知することが出来ないか、國民の輿論が殆ど政黨政治に一致してゐる今日、所謂超然内閣が出現することは、明白なる時代錯誤だと評した。

それから君は常面の政局から觀察を清浦の上に加へて、現在の我國は、官規は紊亂し、人心は動搖し、國民いつれも、その適従するところに迷うてゐる有様だ。故に清浦内閣の施政方針が國民の希望と矛盾するに於ては、國家は愈々危機に類して、到底救ふべからざるに立至

るであらうといつた。尙ほ君は政黨政治について、獨自の見解を下して世間では、政黨を基礎とした内閣のほかは、すべて否認してゐるけれども、さうした輿論はいつ迄續くだらうか。もし局に當るものが山本内閣に向つて加へた攻撃を意義あらしめるために、徹底するまで輿論を指導し、實功を政治の上に具現することに力めないとしたら、政黨内閣の意味も、結局人氣取に過ぎぬとして、國民の多數を失望せしめるであらうと注意した。蓋し君は當時の政黨に見る輕佻浮華の風を戒めたのである。

かうして最初から成立を危ぶまれてゐた清浦内閣は關係の詮衡に困難を生じ不成立に終つた。そこで政界の形勢はまた一轉しようとした。同時に後繼首相の候補離がまた起り、四月八日、再び元老會議が開かれた。その時は、伏見宮親王(貞愛)の臨御を懇請して、善後策を議した。そして散會後、山縣松方らは内田山に井上馨を訪ふた。當時井上は病中であつたので、會議に列することが出来なかつたのである。彼れは清浦推薦の時にも、興津に病臥して、會議に顔を出さなかつた。その彼れが病を推して出京して、内田山の邸へ來たのは、胸中深く決するところがあつたからである。彼れは時局重大なる事を痛感しつゝ、あつたところへ、清浦内閣流産の~~噂~~を耳にして、國家非常の秋によく民意に副ふた人物を首相に推さうと考へた。その時、彼の胸に浮んだのは即ち君であつた。

山本内閣の崩壊と元老會議

103

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

104

#### (四) ~~病中~~ 満死の井上馨躍起して元老會議に臨む

井上は當時の元老中で、最もよく君の人物を理解してゐた。君の勇斷君の輿望君の精力君の達識などに信頼するところが多かつた。それに世論は、直接民衆と交渉を有する國民的代表者の出現を熱望して、政黨内閣を要求し、或は同志中正、國民三派の聯合内閣を希望しつゝ、ある折柄なので、井上はその點にも顧みるところがあつた。そして薩長系人物が首相となると、また一騒動を生すべき事を思つた。それらの理由で、井上はどの點から見ても、君以外に首相たるべき人がないと固く信じたのである。一説にこの事について、江木千之が井上に勸説するところがあつたと傳へ、三浦梧樓の如きも、清浦内閣成立前から、山縣に向つて、「この非常の秋には、大隈伯を起たしめる必要がある。」と説いたさうである。また貴族院方面では、村田保が夙に君を推した。

さて病中の井上は、君を首相に推す決心を以て、使者を山縣、松方、大山らの許に派した。そしてその胸中を傳へさせた。勿論、松方、大山は異議を挟まなかつた。ひとり、山縣は最初、君を首相とする事に反對した。それに向つて、使者は、若し閣下に於て、御異議があらば、閣下自ら出馬して、この難局に當られたい」といふ井上の意を申達した。それには、山縣もぐつと

詰つた。彼れにはこの重大時局を處理すべき自信も無論なかつた。かうして山縣は溢々君の出慮に賛成した。それで使者は急馳して小田原から興津に歸り、この事を井上に傳へた。當時山縣の許へ使したのは望月小太郎であつた。

井上は三元老の胸中を確めて君の出慮に異議を挟まぬことを知ると決然として病聲を蹴つて起ちあがつた。周囲のものは井上の身體を氣遣つたが一度かうと決すると誰れが何といつても聞入れぬので、夫人も井上の上京を留めなかつた。井上は興津から特別列車に身を托し、病苦を忍びながら東京へ急いだ。それは正式の元老會議で君を首相に推薦するためである。かうして井上は四月八日東京の宅へ歸つた。

さて八日午後、山縣、松方の二元老が井上を訪ふたのは正式に開くべき元老會議の下相談で、その席上約三時間に亘つて各自意見を交換したが、結局要領を得る迄に至らなくて、二元老は内田山から辭去した。九日は皇太后陛下の御病氣重態との事で、宮中が混雜したので、會議を開かなかつた。そして十日朝、宮中に於て正式に元老會議が開かれた。それには山縣、松方、大山のほか、新に井上が加はつた。この日井上は愈よ君を首相として推薦する決心で、病苦に屈しないで列席したのである。當時井上は家を出る時、萬一病のため、宮中で倒れるやうな**病中**がある、と君を推薦すべき意思を達する事が出来ないでは不本意だといふ

病中の井上を驚駭起して元老會議に臨む

101

102

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

ので、侍者に命じ君を推薦する理由を奉書紙に書かせ、それを懐にして、會議に臨んだ。井上は深く君の爲すあることを信じ、最後の奉公といふ意味で、身を惜まらずに、この行動に出た。

井上は元老會議の席上、率直に君を首相として推薦するについて、極めて淡泊な態度で打出した。それは桂が首相となると長州征伐をやるものが出る、山本が内閣を引受けるとシイメンズ事件が起る、今日のところ薩長系のものが首相となることは考へ物である。必ず國民や政黨の反感を挑發する。ついでにはこの際、まるで薩長と關係がなく、閥歴、聲望、實力の上で國民の間に人氣ある大隈伯を出すのが一番宜からう、といふのであつた。この事については、既に豫め井上が諸元老の諒解を得てゐたので、誰れも井上に反對するものはなかつた。結局君を後繼首相に推すことに決した。

#### (五) 井上と國事を談ず

それで井上は散會後、使者を君の許に派して君の騒起を勧め、且つ病軀思ふに任せぬので、甚だ勝手であるが、どうぞ私の宅まで駕を枉けて貰ひたい、といふことを傳へしめた。君はちつと使者の言葉を聞いてゐるが、私は到底その任でない。他に適當な人物があらう、といつて辭意を傳へた。君は井上の心持を諒としたが、今更首相たることは自分の晩年を

飾るものではない。自分には政治上厳正な自由批評家としての天職がある。」といふ意を言外にほのめかした。君の態度は悠揚として過らなかつた。が、君は但し陛下から大命が降つた場合は格別である。吾輩はこの老軀を快く國事に捧ぐることを辭せぬ」といつた。そして兎も角、その夜、内田山に井上を訪ふことを承諾した。

君が十日夜、井上を訪ふと、井上は非常に喜んだ。君は井上と打解けて話し合つた。井上は君に向つて、無遠慮に「どうだ、すこしは金が出来たらう」といつた。君はいや相變らずの賣喰ひ生活だ。吾輩の邸も、勸銀へ抵當として入れてある」と答へると、井上は君は相變らず正直だ。そんなに貧乏してゐるのか」といつて、今更驚いたらしい様子であつた。時に井上は君に向つて、熱心に時局の重大なることを話し、十日朝の元老會議の結果を告げて、君の出慮を求めた。君は井上の厚意を衷心感じたが、「今日は最早、吾輩のやうな老人が出る幕ではない。他に適當な人物を出してはどうか」といつて、固く山本内閣のあとを引受けることを辭退した。ところが、井上は君の言に耳を假さなかつた。そして頑強に君の出慮を勧めた。さうなると、君は一概に井上の態度を拒みかねた。「一應考慮を重ねた上、十一日中に何分の御返事を致さう」といつて、君は井上の許を辭去した。

十一日、君は偶々同侯した遊澤榮一、中野武營の二人に向ひ、談餘元老會議の結果、時局收拾

井上と國事を談ず

104

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

105

の大任に當るべき事を勧められた旨に及んだ。二人は君が政治上に厳正批評を下す自由批評家としての位置を尊重して、寧ろ實際政治の渦中に入らぬ方が宜いとしたが、閣下は數十年來、政治的生涯を續けて來られて、各方面の政治家と昵懇であらせられるから、即今の時局が到底閣下の御蹴起によらねば收拾し得ぬとのことならば、出慮致さるゝことも亦止むを得ぬ次第と拜察いたします」と述べた。その他、切に君の自重を望むもの、君が純粹に教育方面で終始せんことを希ふものなどがあつた。が、絶対に君の出慮に反對したものはなかつた。君は時局收拾について、自ら信するところがあつたので、略ぼ新内閣組織の事に決心した。そして午後に入つてから、加藤高明を招いて懇談した。

翌十二日、君は井上邸で、山縣、松方、大山らに逢つた。その日の會議は午前九時から午後三時迄續いた。その席上、君は時局收容についての所見を忌憚なく披瀝した。諸元老も亦各自の時事所觀を述べた。そこに双方略ぼ一致するところがあつた。それで君は始めて安心して、新内閣組織のことを引受けるべき決心をした。この事は、山縣から伏見宮貞愛親王に言上した。

君は井上邸を出ると、歸途、加藤高明の邸へ立寄つた。そしてそこで午後七時半頃まで密議を凝らした。この時、君は同志會の援助を求めて加藤の應諾を得た。以上の事から、君の

組閣説が世上にひろがると新聞では、いづれも君の出慮を歓迎する意を表明した。

### (六) 内閣組織の大命を拜す

四月十三日、到頭君が大命を拜受する時が来た。その日朝君は令嗣信常同伴、恭しく召命を奉じて参内した。そして先づ伏見宮貞愛親王に謁し、更に鷹司侍従長に面會した後、昭憲皇太后崩御のため、廢朝中なるに關らず、特に今上陛下に拜謁することを許された。その際、伏見宮及び鷹司侍従長が参列して、内閣組織の大命を君に降下された。君は謹んで命を拜し、暫く閣員の人選を終るまでの猶豫を請ひ奉つた。それから君は御前を拜辭して、内大臣府で、伏見宮及び鷹司と會談して、程なく宮城から退出した。君はその歸途、更に山縣有朋を訪ふて、晝過ぎ歸邸した。

君は歸邸後、前後して加藤高明、尾崎行雄、犬養毅らを招致して、組閣のことについて諮つた。君は犬養及び尾崎とは個別に話し合つた。それは犬養の都合によるのであつた。その際、君が兩人に語つた要旨は、私は今回最後の奉公として、本日内閣組織の大命を拜したので、多年の交誼上、入閣して一臂の力を添へて貰ひたい」といふにあつた。君は尙ほ政界の實情を説き、時局重大の折であるから、國家のため、切に奮起を要請する旨を約一時間に互つて力を説き、時局重大の折であるから、國家のため、切に奮起を要請する旨を約一時間に互つて力を

内閣組織の大命を拜す

### 第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

強く説いた。また増師問題について君は、犬養に向ひ賛成の意あることを明白に告げた。ところが、犬養は師團問題については、私に年來の主張がありますので、これは同意いたしかねます。また内閣に入るべき人々と私とは、主張を異にしますので、私が入閣すると必ず衝突を來すであらうと思ひます。さうなると却て閣下の御迷惑となるでせうから、私の主張と正反對の政策なき限り、外部から御助けいたしたい。實は閣下が私の入閣を望まるゝに、ついて私も入閣して閣下を補佐したいのですが、右の次第ですから外部からお助けいたすよりほかに方法はありませぬ。然し折角のお話ですから、一應自分の所屬團體に謀つてから正式にお答へ申しませう」と答へて退出した。

次ぎに尾崎は君の話に對して淡白に、この際私を内閣組織者の一人にお加へ願ひたい。それなら快く入閣いたしませう」と存意を述べた。この事について君は一應考慮する旨を告げたので、その日、尾崎はいづれとも決定を見ないで退出した。が翌日に至つて、君は尾崎の申出を承知したので、茲に尾崎の入閣は決定した。

君と加藤との關係も亦極めて圓滿に進行した。君は十日、始めて使者を派して、加藤に面會を求め、その用向を告げた。加藤は十一日君を訪ふた。當時加藤は個人として君の老驥を頼はすに忍びないとしたが、同志會總理としては、時局救済のため、君の出慮を切望した。

そして同志會の主義は大體君の政見と一致してゐるので、加藤は君と會見した際、黨員の一部が閣僚となつて君の抱負實行を心から援助すべき旨を盟つた。かうして加藤は充分の好感を以て君に對し、十四日更に君を訪うて會談した結果、彼れと共に尙ほ三名、大浦、若槻、武富の人たちが同志會からも入閣することになつた。

ところが、犬養は、十四日午後、國民黨の決議をもたらし、君を訪ひ、入閣を辭退した。犬養が君に示した決議は、我黨は大隈内閣の成立を希望し、且つこれを援助す。といふ事及び、犬養總理を始め何人も入閣せぬ。といふことであつた。犬養はそれについて、大隈伯は嘗て増師問題に反對されたに關らず、最近前説を翻して、増師説に賛成された。それは確かに矛盾であると同時に、自分の所信と全く相容れないので、入閣を辭したのである。と語つた。が、多年君の指導を受けた情誼上、犬養は入閣せずとも、何處までも好意を以て大隈内閣を援助する事を聲明した。

加藤高明は、最初から組閣のことに力をつくし、海相の問題についても、君に獻策した。八代六郎が海相となつたのも、加藤の斡旋によるところがあつた。蓋し清浦内閣の不成立は、海相問題にもとづいたので、君は第一にこの點に特別の考慮を拂つた。その結果、加藤に旨を告げて、加藤と竹馬の友で海軍の硬骨者と目されてゐる八代六郎(海軍中將)に手紙で入閣

内閣組織の大命を拜す

第三章 政界革新の使命を帯びた大隈内閣

を懲惡せしめた。その時、八代は加藤友三郎らを海相適任者として推選したが、尙ほ返書の末に併しながら海相の椅子を引受けるものがなければ、不肖國家のため、敢てその任に當ることを辭せぬ。と記して、加藤に答へた。それから間もなく、八代は海軍省の電命で急に入京し、十五日深更、加藤高明、若槻禮次郎と一緒に君を訪ふた。その席上、海軍問題について協議を重ね、圓滿な解決點を見たので、零時四十分頃退出した。茲に八代の入閣は決定したのである。その他の閣僚も亦定つたので、君は始めて安堵した。もう余すところは、親任式に列することだけであつた。

君は十五日八代に逢ふ前、その日の午前中に參内して、組閣の經過を奏上し、夕刻歸邸すると直ぐに多數の新聞記者に對して君の決意を告げた。それは謙遜な態度で君の肺肝を吐露したもので、國を思ふ至情に満ちてゐた。君は先づ諸君我輩を信ぜよ。といつた。そして、今回の内閣組織に關して、諸君の意に満たぬところが或はあるかも知れぬ。而も勇將の下に弱羊なし。諸君は新たに成立すべき内閣が大隈内閣であることを忘れてはならぬ。といひ、官僚政黨の兩弊を矯め、日本の道徳的危機を救はねばならぬ所以を説いてから、諸君は好意の忠言を吾輩に與ふことを惜まないであらう。我輩は喜んで諸君の忠言に聽くつもりである。諸君と我輩とは今や同舟のうちに座して、險惡な波濤の淵を航せんとするの



# 大隈侯傳記 局新



應派大臣の一夫

第六章 新舊勢力の衝突による松隈内閣の分裂

外相の地位を去つた事情

第六章 新舊勢力の衝突による松隈内閣の分裂

外相の地位を去つた事情

第六章 新舊勢力の衝突による松隈内閣の分裂

外相の地位を去つた事情

三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	〇九	〇八	〇七	〇六	〇五	〇四	〇三	〇二	〇一	〇〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

新編



七〇九	六八七	六八五	六七三	六六一	六四九	六三七	六二五	六一三	六〇一	五八九	五七七	五六五	五五三	五四一	五二九	五一七	五〇五	四九三	四八一	四六九	四五七	四四五	四三三	四二一	四〇九	三九七	三八五	三七三	三六一	三五一	三三九
七一〇	六八九	六八六	六七四	六六二	六五〇	六三八	六二六	六一四	六〇二	五九〇	五七八	五六六	五五四	五四二	五三〇	五一八	五〇六	四九四	四八二	四七〇	四五八	四四六	四三四	四二二	四一〇	三九八	三八六	三七四	三六二	三五〇	三三九
七一一	六九九	六八七	六七五	六六三	六五一	六三九	六二七	六一五	六〇三	五九一	五七九	五六七	五五五	五四三	五三一	五一九	五〇七	四九五	四八三	四七一	四五九	四四七	四三五	四二三	四一一	三九九	三八七	三七五	三六三	三五一	三三九
七一二	七〇〇	六八八	六七六	六六四	六五二	六四〇	六二八	六一六	六〇四	五九二	五八〇	五六八	五五六	五四四	五三二	五二〇	五〇八	四九六	四八四	四七二	四五〇	四三八	四二六	四一四	四〇二	三九〇	三七八	三七六	三六四	三五二	三三九
七一三	七〇一	六八九	六七七	六六五	六五三	六四一	六二九	六一七	六〇五	五九三	五八一	五六九	五五七	五四五	五三三	五二一	五〇九	四九七	四八五	四七三	四五一	四三九	四二七	四一五	四〇三	三九一	三七八	三七六	三六四	三五二	三三九
七一四	七〇二	六九〇	六七八	六六六	六五四	六四二	六三〇	六一八	六〇六	五九四	五八二	五六〇	五四八	五四六	五三四	五二二	五一〇	四九八	四八六	四七四	四五二	四四〇	四二八	四一六	四〇四	三九二	三八〇	三六八	三五六	三五四	三三九
七一五	七〇三	六九一	六七九	六六七	六五五	六四三	六三一	六一九	六〇七	五九五	五八三	五六一	五四九	五四七	五三五	五二三	五一一	四九九	四八七	四七五	四五三	四四一	四二九	四一七	四〇五	三九三	三八一	三六九	三五七	三五四	三三九
七一六	七〇四	六九二	六八〇	六六八	六五六	六四四	六三二	六二〇	六〇八	五九六	五八四	五六二	五五〇	五四八	五三六	五二四	五一二	五〇〇	四八八	四七六	四五四	四四二	四三〇	四一八	四〇六	三九四	三八二	三七〇	三五八	三五五	三三九
七一七	七〇五	六九三	六八一	六六九	六五七	六四五	六三三	六二一	六〇九	五九七	五八五	五六三	五五一	五四九	五三七	五二五	五一三	五〇一	四八九	四七七	四五五	四四三	四三一	四一九	四〇七	三九五	三八三	三七一	三五九	三五六	三三九
七一八	七〇六	六九四	六八二	六七〇	六五八	六四六	六三四	六二二	六一〇	五九八	五八六	五六四	五五二	五五〇	五三八	五二六	五一四	五〇二	四九〇	四七八	四五六	四四四	四三二	四二〇	四〇八	三九六	三八四	三七二	三六〇	三五七	三三九
七一九	七〇七	六九五	六八三	六七一	六五九	六四七	六三五	六二三	六一一	五九九	五八七	五六五	五五三	五五一	五三九	五二七	五一五	五〇三	四九一	四七九	四五七	四四五	四三三	四二一	四〇九	三九七	三八五	三七三	三六〇	三五八	三三九
七二〇	七〇八	六九六	六八四	六七二	六六〇	六四八	六三六	六二四	六一二	六〇〇	五八八	五六六	五五四	五五二	五四〇	五二八	五一六	五〇四	四九二	四八〇	四五八	四四六	四三四	四二二	四一〇	三九八	三八六	三七四	三六二	三五九	三三九

六

六

日清印刷株式会社  
東京都千代田区神田七番地  
電話千代 240 241 242

贈

贈

大隈侯傳記  
局部組

世薩政大臣の一矢  
第二章 外薩政力の漸定による松隈内閣の列衣 二七八  
薩政大臣の十  
外相の地位を去つた事 二七九  
第二章 外薩政力の漸定による松隈内閣の列衣 二八〇  
外相の地位を去つた事 二八一  
第二章 外薩政力の漸定による松隈内閣の列衣 二八二  
外相の地位を去つた事 二八三

二七七  
二七九  
二八一  
二八二  
二八三

第二章 總説

國家發展に伴ふ内外多事

組見本

NISSHIN PR

ENOKICHO, USHIGOME-KU, TOKYO



頁附家竹節工同下姐

三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六  
 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八  
 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇  
 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二  
 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四  
 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇  
 一一一 一一二 一一三 一一四 一一五 一一六 一一七 一一八 一一九  
 一二〇 一二一 一二二 一二三 一二四 一二五 一二六 一二七 一二八  
 一二九 一三〇 一三一 一三二 一三三 一三四 一三五 一三六 一三七  
 一三八 一三九 一四〇 一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六  
 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五  
 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一 一六二 一六三 一六四  
 一六五 一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三  
 一七四 一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇 一八一 一八二  
 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一  
 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇  
 二〇一 二〇二 二〇三 二〇四 二〇五 二〇六 二〇七 二〇八  
 二〇九 二一〇 二一一 二一二 二一三 二一四 二一五 二一六 二一七  
 二一八 二一九 二二〇 二二一 二二二 二二三 二二四 二二五 二二六  
 二二七 二二八 二二九 二三〇 二三一 二三二 二三三 二三四 二三五  
 二三六 二三七 二三八 二三九 二四〇 二四一 二四二 二四三 二四四  
 二四五 二四六 二四七 二四八 二四九 二五〇 二五一 二五二 二五三  
 二五四 二五五 二五六 二五七 二五八 二五九 二六〇 二六一 二六二

6 年



二六三 二六四 二六五 二六六 二六七 二六八 二六九 二七〇 二七一 ~~二七二~~

二七三 二七四 二七五 二七六 二七七 二七八 二七九 二八〇 二八一 二

二八二 二八三 二八四 二八五 二八六 二八七 二八八 二八九 二九〇

二九一 二九二 二九三 二九四 二九五 二九六 二九七 二九八 二九九

三〇〇 三〇一 三〇二 三〇三 三〇四 三〇五 三〇六 三〇七 三〇八

三〇九 三一〇 三一〇 三一〇 三一〇 三一〇 三一〇 三一〇 三一〇

三一八 三一九 三二〇 三二一 三二二 三二三 三二四 三二五 三二六

三二七 三二八 三二九 三三〇 三三一 三三二 三三三 三三四 三三五

三三六 三三七 三三八 三三九 三四〇 三四一 三四二 三四三 三四四

三四五 三四六 三四七 三四八 三四九 三五〇 三五〇 三五二 三五三

三五四 三五五 三五六 三五七 三五八 三五九 三六〇 三六一 三六二

~~三六三~~ 三六三 三六四 三六五 三六六 三六七 三六八 三六九 三七〇

三七一 三七二 三七三 三七四 三七五 三七六 三七七 三七八 三七九

三八〇 三八一 三八二 三八三 三八四 三八五 三八六 三八七 三八八

三八九 三九〇 三九一 三九二 三九三 三九四 三九五 三九六 三九七

三九八 三九九 四〇〇 四〇一 四〇二 四〇三 四〇四 四〇五 四〇六

四〇七 四〇八 四〇九 四一〇 四一一 四一二 四一三 四一四 四一五

四一六 四一七 四一八 四一九 四二〇 四二一 四二二 四二三 四二四

四二五 四二六 四二七 四二八 四二九 四三〇 四三一 四三二 四三三

四三四 四三五 四三六 四三七 四三八 四三九 四四〇 四四一 四四二

四四三 四四四 四四五 四四六 四四七 四四八 四四九 四五〇 四五一

四五二 四五三 四五四 四五五 四五六 四五七 四五八 四九九 四六〇

四六一 四六二 四六三 四六四 四六五 四六六 四六七 四六八 四六九

6 平

3

6 平

四七〇	四七一	四七二	四七三	四七四	四七五	四七六	四七七	四七八	四七九
四八〇	四八一	四八二	四八三	四八四	四八五	四八六	四八七	四八八	四八九
四九〇	四九一	四九二	四九三	四九四	四九五	四九六	四九七	四九八	四九九
五〇〇	五〇一	五〇二	五〇三	五〇四	五〇五	五〇六	五〇七	五〇八	五〇九
五一〇	五一一	五一二	五一三	五一四	五一五	五一六	五一七	五一八	五一九
五二〇	五二一	五二二	五二三	五二四	五二五	五二六	五二七	五二八	五二九
五三〇	五三一	五三二	五三三	五三四	五三五	五三六	五三七	五三八	五三九
五四〇	五四一	五四二	五四三	五四四	五四五	五四六	五四七	五四八	五四九
五五〇	<del>五五一</del>	五五二	五五三	五五四	五五五	五五六	五五七	五五八	五五九
五六〇	五六一	五六二	五六三	五六四	五六五	五六六	五六七	五六八	五六九
五七〇	五七一	五七二	五七三	五七四	五七五	五七六	五七七	五七八	五七九
五八〇	五八一	五八二	五八三	五八四	五八五	五八六	五八七	五八八	五八九

4

五九〇	五九一	五九二	五九三	五九四	五九五	五九六	五九七	五九八	五九九
六〇〇	六〇一	六〇二	六〇三	六〇四	六〇五	六〇六	六〇七	六〇八	六〇九
六一〇	六一一	六一二	六一三	六一四	六一五	六一六	六一七	六一八	六一九
六二〇	六二一	六二二	六二三	六二四	六二五	六二六	六二七	六二八	六二九
六三〇	六三一	六三二	六三三	六三四	六三五	六三六	六三七	六三八	六三九
六四〇	六四一	六四二	六四三	六四四	六四五	六四六	六四七	六四八	六四九
六五〇	六五一	六五二	六五三	六五四	六五五	六五六	六五七	六五八	六五九
六六〇	六六一	六六二	六六三	六六四	六六五	六六六	六六七	六六八	六六九
六七〇	六七一	六七二	六七三	六七四	六七五	六七六	六七七	六七八	六七九
六八〇	六八一	六八二	六八三	六八四	六八五	六八六	六八七	六八八	六八九
六九〇	六九一	六九二	六九三	六九四	六九五	六九六	六九七	六九八	六九九
七〇〇	七〇一	七〇二	七〇三	七〇四	七〇五	七〇六	七〇七	七〇八	七〇九

七五〇  
七四〇 七四一 七四二 七四三 七四四 七四五 七四六 七四七 七四八 七四九  
七三〇 七三一 七三二 七三三 七三四 七三五 七三六 七三七 七三八 七三九  
七二〇 七二一 七二二 七二三 七二四 七二五 七二六 七二七 七二八 七二九  
七一〇 七一一 七一二 七一三 七一四 七一五 七一六 七一七 七一八 七一九

625

5上